集

俳句フォーラム

2018年1月 第66号

白山句会

秋深む　浦川哲子

初陣の前立兜大蟷螂
歓声の中の悲鳴や運動会
生者にも月見団子をひとつづつ
カフェオレと古いビデオと秋夜半
秋深む利休鼠の懐紙入れ

涼新た　都築繁子

涼新たマネキンゆっくり回転す
万緑の清水観音月の松
甲羅干す亀の放列風涼し
ふるさとは遠し子と見る遠花火
家事の間のテレビ体操秋来たる

祝宴　田中藤穂

盆の夜の暑さ仏になげくかな
雹降って落ちし青葉に町埋まる
軒並に雹害のあと秋暑し
秋晴れの祝賀会歌声の湧く
秋の宴カーテンの外夕暮れて

生身魂　平野無石

多忙よし閑もまたよし生身魂
爽やかや日野原医師の尊厳死
エンジンの音に鰯飛ぶ伊豆の海
甲子園の余韻を肴新走り
変る世の変らぬ風味衣被

大磯吉田邸　植木やす子

萩こぼれ官邸繋ぐ黒電話
宿の下駄急ぎつっかけ蛍追う
木下闇猿に注意と旧街道
切株の椅子で団欒秋立ちぬ
獅子舞の運ぶおみくじ日の盛り

蓮咲く　工藤はる子

白球追ふ若きまぼろし子規の汗
蓮の花開くかと見ゆ乙女色
観音の面影うつし蓮咲く
子らの声無き公園や夏休み
新涼やうつらうつらと朝の床

酔芙蓉　篠田純子

蓮池にはすの匂いの風清々
あれは亀これはすっぽん池涼し
暑き日の口開けているおびんずる
カラカラに桶干す夏の佃煮屋
九十歳は紅さす頃の酔芙蓉

記憶　大山夏子

百日紅いくさの記憶消えぬ紅
灯籠の一つ流れに逆らいて
凌霄花散りつぐ足の置きどころ
みんみんの至近距離から子等の声
大夏木道の真中に馬車返し

水元公園を歩いて

都築繁子

中高年のクラブの一員として、水元公園にウォーキングに行って来ました。

水郷と森林の景観を持つ水元公園は、総面積九六・三万平方キロメートル、埼玉県と葛飾区の境の小合溜（こあいだめ）に沿って造られた都内屈指の広さをほこる水郷公園です。小合溜は八代将軍吉宗の指示のより江戸の町を洪水から守るため、河川の改修によって出来た溜池で、小合溜から引いた大小の水路が園内を走り、さわやかな眺めです。

当日は大手町経由ＪＲ金町駅下車。駅前からバスで「水元五丁目」へ、さらに歩いて都内唯一のレンガ造りのアーチ橋「閘門橋」を渡り「水元かわせみの星」を見学しました。高さ二十メートルにも達するポプラの並木道をひたすら歩き、つくづく空が広いと感じました。

天をつくポプラ並木や夏帽子　繁子
青葉風しんがりをゆく並木道　〃
河骨咲く白鷺一羽さりげなし　〃

左手前方にはメタセコイアの森が広がっています。途中、釣り糸を垂れる人も多く見られました。

水元大橋を渡ると都内最大規模の菖蒲園で、折から菖蒲まつりの最中でした。約百種二十万本の菖蒲がピンク、紫、白など色とりどりの花が咲き誇っていました。

太鼓の音総立ちとなる花菖蒲　　繁子
紫の色ひろがりぬ菖蒲茶屋　　〃　〃
花菖蒲脚休ませる木のベンチ　　〃

菖蒲園をあとに「葛飾区金魚展示場」へ。コンクリートの大きくて浅い水槽がたくさん置かれ、珍しい高価そうな金魚が泳いでいます。名前を確かめながら見て回りました。

りゆう金の尾びれを揺らす自己主張　　繁子
華麗なる金魚の尾びれ空広し　　〃　〃
飽かず見る屋外展示の江戸金魚　　〃　〃

金魚の展示場の後、アサザの花の咲いているごんぱち池の前を通り、公園の外に出ました。今日の歩行距離は五キロでしたが、一般のウオーキングコースはこれから江戸川土手へと続くようです。

桜土手バス停から金町駅へバスに乗り、駅前で食事をして解散しました。

土、日、祝日にJR金町駅発着の公園沿いを走る循環バスが運行されていますので又、別の季節に行ってみたいと思います。

2017年9月9日　日立目白クラブにて

藤の会

緋色　大山夏子

無茶苦茶な言い分でで虫殻に入る
やるべき事遅々と進まず新茶汲む
日盛りや信号赤に変わりたる
天も地も私も緋色大夕焼け
手花火や妣も背後で見ておりぬ

泥鰌鍋　石川賢吾

御馳走と言へば御馳走泥鰌鍋
暑気払大雄山に座禅組む
迎え火や生真面目すぎた父の顔
階に明治の軋みとろろ汁
三井の鐘萩のこぼるる石畳

風化　江口九星

風化して読めぬ墓誌読む獺祭忌
石室の語らぬ上を赤とんぼ
あてもなく行く蝸牛いしの上
顔出した茗荷摘み取り夕餉とす
蜩の声が途絶えて父命日

風　渡辺節子

カフカスの山麓柘榴たわわ食む
辺境に棲みて可憐に咲く木槿
団扇が運ぶ原野の風を手土産に
白昼の屏息の村青嵐
夫想う夕焼けに染まるカスピ海

蜘蛛の糸　中川のぼる

西瓜の花夢と花粉をつけはしやぐ
灰色の空も心も蟻地獄
真理とは風に揺れいて蜘蛛の糸
初蝉や静けさ装ふ緋衣の僧
都心から終バスに乗る月の客

国境の風　伊藤昌枝

鴎飛ぶ東京湾へ草矢射る
蕗茹る灰汁の苦さも郷(くに)の味
弟が護りし生家稲の花
蚊喰鳥逢魔が時の恐ろしき
大花野入れて国境風ばかり

無人坂（関ケ原にて）　楠本和弘

無人坂おらび聞こゆる白雨かな
子等の声緋色黄色や大花火
江戸の藍白雨去りにしベイエリア
打水や振り返りたる夜叉の面
出番待つ山車の頭領プレスリー

火傷　吉宇田麻衣

覚悟無き火傷の痛み秋の暮
百日紅揺るる思いは色々に
おトがりのかたち嫌がる水着かな
炎昼や泣く子抱き上げあやしけり
雨雲に心残りの煙火かな

生きる　渡部恭子

極楽の居心地いかが初の盆
夕涼や線香優しき灰の色
ゴスペルの余韻や滲む帰路の月
生き死にを思う石段曼珠沙華
梵鐘の秋澄む細音比叡山

秋高し　小沢えみ子

巴里祭アルファベットのビスケット
ポケットの映画の切符夏の果
通り雨カンナに残る緋の雫
月半ば急き立てらるる秋の蝉
自転車の先頭は母秋高し

緑酒　酒井たかお

学徒にも観せたや熱き甲子園
鎮魂の野に赤蜻蛉群れ飛びて
野馬追や緋縅武者の砂塵上げ
不忍の些事吹き飛ばす蓮の池
ゴーヤ棚酌み交わす影緑酒かな